

『無垢と経験の歌』におけるブレイクの子供観： 18世紀女性詩人との比較

高梨 絵梨沙

ウィリアム・ブレイク (William Blake) は『無垢と経験の歌』 (*Songs of Innocence and of Experience*, 1789) の幾つかの詩で自らの言葉で語り、主張をする子供を描き、独自の子供観を示した。本稿では18世紀に広く受け入れられた教育書を書いたジョン・ロック (John Locke)、聖職者で子供の為の賛美歌を執筆したアイザック・ワッツ (Isaac Watts) の著書から読み取れる教育に関する考えからその子供観分析を試みる。次に『子供の為の散文による賛美歌』 (*Hymns in Prose for Children*, 1781) の著者アンナ・レティシア・バーボールド (Anna Laetitia Barbauld)、『抒情的物語集』 (*Lyrical Tales*, 1800) で子供を題材とする詩を書いたメアリー・ロビンソン (Mary Robinson) らブレイクと同時代の女性詩人の作品に表れる子供観を考察する。バーボールドは、ブレイクと共に急進主義の作家達の本を出版したジョゼフ・ジョンソン (Joseph Johnson, 1738–1809) の下で本を出版しておりブレイクと関わりが深い。最後にブレイクの『無垢と経験の歌』の詩に表れる彼の子供観と前述の男性作家、女性作家との比較を試みる。

I. 『教育に関する考察』と『子供のための賛美歌』に見られるロック、ワッツの子供観

ロックの『教育に関する考察』 (*Some Thoughts Concerning Education*, 1693) は、親族であるサマセットの大地主エドワード・クラーク (Edward Clark) の長男の教育への提言として書かれた。この著書でロックは、人間

は心身共に天性の強さを持っているが、それを持ち続ける例は稀であり、教育によってその人の善悪や役に立つ人間になるかどうかが決まると述べ(6)、健康面から子供達の遊びに至るまで大人が導く事の重要性を示した。

ロックが捉えていた子供達の特徴は、第一に彼らが無知な事であり、無知から導き出してくれる大人が側にいる子供こそが幸せだという考えを示した(117)。第二の特徴は、子供達が悪い事を覚え易い傾向にある事である。例えば子供に質問をされた時に、大人は配慮のある答えをしないと子供達が偽る事や誤魔化しを学んでしまう為彼らを軽視し、騙す事をしないよう忠告している(116)。

一方、ロックは教える側の大人に対して以下の心得を書いている。第一の心得は子供の理性を重視する事である。

The great mistake I have observed in people's breeding their children has been, that this has not been taken care enough of in its due season; that the mind has not been made obedient to discipline, and pliant to reason, when at first it was most tender, most easy to bowed. (27)

ここでロックは子供をごく幼い時期から理性を持った人間になる様に教育する事を重視し、子供に理性的である事を求めた。また子供達は言葉の習得と同時に理性的なものを理解することができ、理性ある生き物として扱ってもらう事を好むと考えた(69)。第二の心得は大人と子供の関係の築き方についての忠告である。両親には、子供達が幼い時期から両親の意志に完全に従う様彼らの我儘を諫めていくべきとし(32)、父親には子供が服従を学んだらすぐに父親の権威を確立する事を薦め(29)、子供が分別ある大人に従う様に教育せよとしている。第三の心得は大人が子供の考えを統制する事である。例えばロックは教師への忠告として、子供が遊びの時間に遊び仲間にする様に教師に対して何かを教えてほしいと頼むよう仕向ける事を薦めている(62)。ロックの教育方針においては、子供の遊ぶ自由や知識欲さえも大人に管理される。彼は子供時代を理性的な大人になる為の過程

として捉えており、その様な大人となる手助けをする事を重視した。

ワッツは「子供達と若者の教育について」(“A Discourse on the Education of Children and Youth,” 1725) で次世代を担う子供達を害悪から守る為の教育の重要性を述べ(357)、子供が潜在的に良心を持っている事も指摘している。

Children have a conscience within them, and it should be awakened early to its duty. [...] Parents should teach their children to pay a religious respect to the inward dictates of virtue with in them [...] (363)

子供の持つ美德を守る為、ワッツも早期に子供達を教育する事を提案している。彼は著書『子供の為の神聖な歌』(*Divine Songs for Children*, 1715, 以下『神聖な歌』と略記)の「早期の信仰の利点」(“The Advantage of Early Religion”) で次の様に書いた。

Happy the child whose tender years
Receive instructions well:
Who hated the sinner's path, and fears
The road that leads to hell.

When we devote our youth to God,
'Tis pleasing in your eyes;
A flow'r, when offer'd in the bud
Is no vain sacrifice. (ll. 1-8)

8行目の“vain sacrifice”とは子供が早期に教育されなかった場合、子供が悪い行いに染まる事だと解釈できる。またワッツは子供に対してロック同様教えてくれる者に素直に従う事を求めた。同著の「子供の不満」(“The Child's Complaint”) にそれが読み取れる。

Why should I love my sport so well,
So constant at my play.

And lose the thoughts of heaven and hell,
And then forget to pray!

What do I read my Bible for,
But, Lord, to learn thy will? (ll. 1-6)

この詩の語り手は第1連で遊びに夢中になって聖書の話やお祈りを忘れる事を子供らしく告白し、聖書を読む事に対しては懐疑的な意見を述べる。しかし第3連では神に許しを請う。

Make me thy heav'nly voice to hear,
And let me love to pray;
Since God will lend a gracious ear
To what a child can say. (ll. 9-12)

ここで子供が主張を失い、神に導かれる事に従順な態度を示す事でその主張の脆さが表れている。ワッツは子供の潜在的な良心は認めているが、その美德を保つには大人が施す教育や、キリスト教的な教育を通じて得られる神の教えが必要だと考えた。

II. 女性詩人達の子供観

バーボールドは『子供の為の散文による賛美歌』の序章で、多くの本が子供たちの為に作られており、理性や秩序について説明するもの、宗教的な定義を要約するものがあるがそれらは子供達には難しいと指摘している。また彼女はワッツの子供の為の賛美歌を評価する一方で、詩の形式は子供達にとって難しいと述べた(1-2)。バーボールドは子供の視点に立ち、彼らが理解し易い様に賛美歌を散文で書いた。しかし彼女の考えは子供を早期に教育する事についてロックやワッツと共通しており同著の「賛美歌1番」(“Hymn I”)から読み取ることができる。

I will praise God with my voice; for I may praise him though I am but a little child. A few years ago, and I was little infant, and my tongue was dumb within my mouth: And I did not know the great name of God, for my reason was not come unto me. But now I can speak, and my tongue shall praise him; I can think of all his kindness, and my heart shall love him. (9-10)

上記の引用から彼女が早期の教育に賛成し、理性を重視した事が読み取れる。彼女の特徴は子供の語り手が、自分の言葉で神を称える事ができ、神の愛について“*I think*”と自ら考える事を主張している事にある。ワッツが書いた「子供の不満」の語り手は受動的に神の声を望むが「賛美歌1番」の子供は一方的に教わるのではなく、自分の言葉や考えも大切にする。その考えはバーボールドが生まれてくる自分の子供の事を書いた詩「もうすぐやって来るまだ見ぬ小さな君に」(“*To a Little Invisible Being Who is Expected Soon to Become Visible*”)にも表れている。バーボールドは第2連で以下のように子供の持つ力の事を述べている。

What powers lie enfolded in thy curious fame —
Senses from objects locked, and mind from thought
How little canst thou guess thy lofty claim
To grasp at all the worlds the Almighty wrought! (ll. 5-8)

バーボールドが述べる、子供が持つ主張は当時の世の中では殆ど認められなかった。これは社会における子供という存在の無力さを表す。しかしバーボールドは子供の力を否定しておらず、第7連で“*Nor wit nor eloquence her heart shall move / Like the first accents of thy feeble cry*” (ll. 27-28)と子供が母親の心に働きかける力を示唆している。バーボールドの子供観は子供の視点に立つ事や子供が主張を持っていると認める事において独自性が見られる。

またロックは『教育に関する考察』で中、上流階級の子供達の教育につ

いて説いたが、バーボールドは散文「教育について」(“On Education”) で子供の教育において重要なのは教育費をかけて教師が与える学問ではなく親が持つ習慣や好み、子供を取り巻く社会や家庭環境による無意識の教育であり、それにより子供達がどんな人間になるか決まる事(305-307)を指摘している。また貧しい者も裕福な者と同様に教育が必要であり、親自身が子供を教育する事は学者でも読み書きができない者でも同様にできると記した(317)。バーボールドは貧富の差には関りなく子供に教育を施しその人格を尊重すべきと考えていた。

ロビンソンは『抒情物語集』の「一人ぼっち」(“All Alone”) で子供に直接語らせ詩の語り手である大人に反論させた。大人と意見が異なる時に素直に従うのではなく、反論し自分の意見を主張する子供を描いた事がこの詩の特徴である。この詩の語り手はアン・ジャノウイツ (Anne Janowitz) が母親の墓の側で泣く孤児に同情的で彼の孤独を理解しようとするだけでなく、理解している事を主張して孤独から抜け出させようする(95)と解釈する様に、一貫して子供に同情を寄せて子供を救おうと試みる。語り手はまず子供を孤独な状態から集団に戻すように試みている。

Weep, weep no more; on yonder hill
 The village bells are ringing, gay;
 The merry reed, and brawling rill
 Call thee to rustic sports away.
 Then wherefore weep, and sigh, and moan,
 A truant from the throng — alone? (ll. 43-48)

語り手が遊びに誘いだす事は一人ぼっちの子供を彼が属する田園の村の地域社会を表す“throng”に戻す事を示す。語り手は次に子供を見守る自分の存在を強調する。

Thou art not, boy, for I have seen
 Thy tiny footsteps print dew, [...]

I heard they sad and plaintive moan,
Beside the cold sepulchral stone. (ll. 115–120)

上記の箇所語り手は子供に「私は見てきた」、「私は聞いた」と繰り返し自分との結びつきを強調する事で、彼が一人ぼっちではないと説得を試みる。しかし子供は、次の様に語り手に反論する。“I cannot the green hill ascend, / [...] / For all is still, beneath yon stone, / Where my mother’s left alone. (ll. 49–54). ここで子供の意志が明確に示され、更に詩の後半部分でも母親の墓に行く事について語り手に“O stay me not, for I must go / the upland path in haste to tread” (ll. 67–68) と強く主張している。大人に反論し意志を示す点で、ロックが書いた導く大人と従順な子供という関係とは異なる。

子供が次に主張するのは、一人ぼっちの定義の語り手との考え方の相違である。幼い子供が母親の死を理解できないのだという解釈もできるが、後の部分で “[...] she lies mould’ring all alone” (ll. 71–72) と母親の肉体が朽ちる事に言及している為彼は肉体的な死を理解している事が分かる。以下に子供の一人ぼっちについての定義が示される。

“I have no kindred left, to mourn
When I am hid in yonder grave!
Not one! to dress with flow’rs the stone;
Then — surely, I AM LEFT ALONE!” (ll. 144–150)

子供にとって一人ぼっちとは自分が死んだ時に悲しんでくれる人、弔う人がいない事だ。彼は自分の死後まで見通して自分が一人ぼっちだと主張するのに対し、語り手は在世の一人ぼっちから子供を救おうとする。双方の主張が一致する事はなく、自らの価値観を押し付ける語り手は詩の最後まで子供を救うことができない。また子供も語り手が自分を救えない事を理解しており、頑なに「一人ぼっちだ」と繰り返す。ロビンソンがこの詩で描く語り手と主張を持った子供の関係は、ロックが主張した教える事にお

いて子供に優勢な大人と無知な子供という関係ではない。

III. ブレイクの『無垢と経験の歌』に表れる子供観

ブレイクは『無垢と経験の歌』の幾つかの詩において子供達自身の言葉で彼らに語らせ、その子供観を示している。本稿では『無垢の歌』の「仔羊」(“The Lamb”)、「乳母の歌」(“Nurse’s Song”)、『経験の歌』の「一人の失われた少年」(“A Little Boy Lost”)、「煙突掃除の少年」(“The Chimney Sweeper”)、「小さな宿無し」(“The Little Vagabond”)、「小学生」(“The School Boy”)を取り挙げて分析する。

「仔羊」の詩の語り手は、教えられた賛美歌を無邪気に繰り返す子供と解釈できる。詩の冒頭は子供の問いで始まる。“Little lamb who made thee / Dost thou know who made thee / Gave thee life& bid thee feed. / By the stream & o’er the mead; / Gsve thee clothing of delight” (ll. 1-4). その問いへの返答が詩の後半で以下の様に述べられている。

Little Lamb I tell thee,
Little Lamb Ill tell thee;
He is called by thy name,
For he calls himself a Lamb. (ll. 13-16)

ここで“*He*”は神の事を示し、神が仔羊を自称し子供に姿を変えている事を示している。しかし、語り手の子供は神を称えるのではなく、“I a child & thou a lamb, / We are called by his name” (ll. 17-18) と述べて自分達子供と仔羊、神が同じ名前を持つ事を重視する。ヘザー・グレン (Heather Glen) は18世紀の聖職者、賛美歌作家のチャールズ・ウェスリー (Charles Wesley) による「優しいイエス、従順で優しく」(“Gentle Jesus, Meek and Mild”)の影響を指摘する(23)。ウェスリーの賛美歌では語り手の子供が次の様に語る。

Lamb of God, I look to thee;

Thou shalt my Examples be;
 Thou art gentle, meek, and mild;
 Thou wast once a little child. [...]

Thou didst live to God alone;
 Thou didst never seek Thin own [...] (ll. 9–22)

ウェスリーの賛美歌では、子供が神の仔羊であるイエスを称え自分の模範とする事に重点が置かれている。グレンの指摘によるとウェスリーはこの賛美歌で子供らしい話し方を描く事に成功しているが、その内容は大人の論理による自己抑制と、子供と仔羊、地上のキリストと天上の神との理性的な対比の重視である(24)。またバーボールドも『子供の為の散文による賛美歌』の「賛美歌2番」(“Hymn 2”)に神の被造物として鶏の雛や蝶々等他の動物と共に仔羊を登場させているが、“The young animals of every kind are sporting about, [...] they are glad to be alive, they thank him that has made them alive”(15)と述べているように、創造主である神への感謝を強調している。バーボールドは子供に身近な動物を用いて子供が神への感謝を学ぶよう、この賛美歌を書いた。一方ブレイクの語り手は、大人に教えられたウェスリーの賛美歌を繰り返す中で、自分が納得できる理解し易いものに変化させている。語り手はキリストを手本に自己抑制の生き方を学ぶ事や創造主としての神を称える事に焦点をおいておらず、神と仔羊が同じ名を持つという子供自身に理解し易い事実を強調している。語り手の子供は自分達に分かり易いよう独自に賛美歌を変え、彼なりに解釈をしていると言う事ができる。ブレイクは、子供はただ受身に教えられるだけではなく、習った事を自分なりに理解し、考える能力があるのだという事を示した。このブレイクの子供観は、子供達の考えを統制しようとするロックとは異なっている。

「仔羊」と同様子供が大人から教わった事に自分の理解を加える例として挙げられるのが『経験の歌』の「失われた少年」である。

Nought loves another as itself
 Nor venerates another so.
 Nor is it possible to Thought
 A greater than itself to know.

And Father, how can I love you,
 Or any of my brothers more?
 I love you like the little bird
 That picks up crumbs around the door. (ll. 1–8)

この冒頭の二連にわたる少年の言葉について、アンドリュー・リンカン (Andrew Lincoln) は超越的な神を理解する事や愛する事を暗に否定するものだ (197) と解説し、D. G. ギルハム (D. G. Gilham) もこの少年の発言について当時ロックらが唱えていた理神論との関連を指摘し、少年が理神論に傾倒する大人の会話を聞いて学んだと主張している (85)。子供が理神論についての書物を読んで学び、発言したとは考えにくく、ギルハムの指摘する様に大人の会話を聞いてそれを述べていると考えられる。しかし少年が日頃から疑問に思っていなければこのような主張をする事もない。彼は自分にとって身近な小鳥の表現で自分なりに理神論の思想を解釈している。詩の後半で登場する司祭が怒りを露にする理由は (“In trembling zeal,” l 10)、子供が理神論的な思想を口に出すのみでなく、自分なりに理解して解釈を加える事にある。それは教会の権威だけでなく子供を教え、その考えを統制する役割を持つ大人の権威をも傷つける行為だからである。この詩の結末で子供は処刑されるが、その様子は次の様に描かれる。

The weeping child could not be heard,
 The weeping parents wept in vain:
 They strip'd him to his little shirt.
 And bound him in an iron chain. (ll. 17–20)

ここで子供は泣いて詫びているので第1連、2連での発言には異端の意が

ない事が解るが異端者の様に火刑に処される。彼は司祭の振りかざす權威の犠牲者となるが、第1連と2連の主張によって大人から聞いた事を自分なりに解釈する子供の力を示した。

第三に取り挙げるのは『経験の歌』の「煙突掃除の少年」である。この詩で煙突掃除の少年は語り手の大人に以下の様に自分を煙突掃除として売った両親への不満を述べる。

Because I was happy upon the heath,
 And smil'd among the winters snow:
 They clothed me in the clothes of death.
 And taught me to sing the notes of woe.

And because I am happy. & dance & sing.
 They think they have done me no injury:
 And are gone to praise God & his Priest & King
 Who make up a heaven of our misery. (ll. 4-12)

“notes of woe”とは煙突掃除が通りであげる“weep”(ll)という声を意味しており、それを教える事は両親が彼を煙突掃除として売った事を表す。また少年は両親が自分の辛さを理解していない事を責めている。煙突掃除の少年による両親への非難は両親が、バーボールドが述べた様な貧しくとも子供に無意識の教育を施す事を怠っているのを示す。また最終行についてギルハムはこの子供にとって神は司祭や王の協力者であると解釈している(45)。煙突掃除の少年の主張は神や聖職者、国王そのものへの抗議ではなく、自分を辛い運命に追いやった両親が崇めるものに限定して批判している。この批判に表れるのは少年が自分の置かれた境遇の原因を探り、大人に主張する力だ。またバーボールドの詩の子供は堂々たる主張を持っていても世の中では無力だという考えにもある様に、この子供も自らの運命を自分で決める事はできずに煙突掃除の仕事に従事している。しかし、それでもあきらめずに大人の語り手に訴える子供の強さをブレイクの煙突掃除は体現した。

同様に子供が自分の境遇について意見している詩として『経験の歌』の「小さな宿なし」が挙げられる。

Dear Mother, dear Mother, the Church is cold,
But the Ale-house is healthy & pleasant & warm:
Besides I can tell where I am use'd well,
Such usage in heaven will never do well.

But if the Church they would give us some Ale.
And a pleasant fire, our souls to regale:
We'd sing and we'd pray all the live-long day:
Nor ever once wish from the Church to stray. (ll. 1-8)

語り手の子供は大人である母親に語りかけており、その内容は彼なりに考える教会の改善である。ギルハムは、冷たい手でなされる義務としての慈善や教会の厳格さ、抑制等を見てきた宿無しの少年の主張は的を射た真実だと主張する(198)。ギルハムが言う様にこの少年は教会の行う彼らへの救いが実際の生活を豊かにはしないと指摘し、居酒屋のように暖かい部屋でエールを飲ませるといふ彼らの現実的な生活の救いとなる事をして欲しいと教会に提案している。また4行目では教会の説く死後の救いについて彼が理解している事を示唆する。例えばワッツは『神聖な歌』の「天国と地獄」(“Heaven and Hell”)において、次の様に死後の救いの為に祈りを捧げよと説いている。“Then will I read and pray, / While I have life and breath; Lest I should be cut off to-day, / And sent t' eternal death” (ll. 13-16). 教会に出入りする語り手はこうした賛美歌を知っていたと推測できるが、彼は現実的であり、死後の救いではなく現世の救いを求めている。彼が母親にこの提案を語る事は、子供がキリスト的教を踏まえた上で自分の生活改善の方法を大人に訴える力がある事を示す。

第四、第五の詩は教育者と子供の関係を示す詩であり、子供は教育者に対して自分の考えを主張し不満を訴える。「小学生」において語り手の少年は学校の教師について次の様に述べる。“Under a cruel eye outworn. / The

little ones spend the day, / In sighing and dismay” (ll. 6–10). 子供は教師の高圧的な態度を批判し子供を脅かす存在としている。また早期に厳しい躾を受ける事について語り手は次の様な主張をする。“[...] if buds are nip’d, / And blossoms blown away” (ll. 21–22). この主張は「早期の信仰の利点」でワッツが早期教育について書いた“A flow’r, when offer’d in the bud / Is no vain sacrifice” (ll. 7–8) という表現と対照的だ。ブレイクは教育の名の下に子供から喜びや子供時代の自由を奪う事について、大人の意見として抗議を述べるのではなく、子供の言葉で子供自身の不満として詩に表した。

第五の詩は『無垢の歌』の「乳母の歌」である。この詩では子供が自分の教育者に対する意見を直接教育者自身に訴えている。日暮れ時に遊んでいる子供達に対し第二連で“Come come leave off play, and let us away / Till the morning appears in the skies” (ll. 7–8) という乳母に子供達は次の様に意見する。

No no let us play, for it is yet day
 And we cannot go to sleep
 Besides in the sky, the little birds fly
 And the hills are all covered with sheep (ll. 9–12)

子供達は乳母が習慣的に暗くなったから家に帰り、自分達を寝かせようとする事に対し、眠くはないという意味と小鳥や羊がまだいるという事実を主張する。乳母は“Well well go & play till the light fades away” (34) と受け入れる。このやりとりの意義は、子供達が自分の言葉で教育者の乳母を説得した事だ。ワッツが「子供の不満」で描いた子供は自分から主張を曲げて神に救いを求める。一方ロビンソンは「一人ぼっち」で大人に対して自分の主張を通そうとする子供を描いたが、語り手の大人は子供の主張を理解できない。しかし、ブレイクの詩では大人が子供達に対して教育者としての権威を振りかざすのではなく、彼らの主張を受け入れる。この詩には

子供達の主張し、説得する力と子供の主張を理解して受け入れようとする進歩的な大人の姿が描かれており、乳母はロックらの主張する子供に対して何かを教える大人ではなく子供の主張から何かを学ぼうとする大人である。

結論

ロックやワッツは子供達を早期に導き、理性的な大人となる過程を重視する教育を提案したが、教えられる側の子供達は受動的な存在である。一方女性作家達は大人になる為の過程としてではなく、子供そのものに着目し、子供の視点に立って子供の自主性や主張を大切にした。本稿で取り挙げた詩におけるブレイクの子供観は女性作家達の考えに近い。ブレイクは子供の大人に教えられた事を自分なりに考え、理解する力や、大人に導かれた通りに生きながらも自分の置かれた劣悪な状況の根源が何かを考える力、改善策を提案する力、教育者を批判する力や大人を説得する力を描いた。それはロックやワッツが描いた大人が教える事に対して従順な子供ではなく、自ら考え、探究し、意見を言う子供達である。またブレイクとロビンソンは、子供達が大人に対して主張する事で子供が大人に教え、提案するという新たな関係を描き、それを理解する或いは理解しようとする大人を登場させた。ブレイクの「乳母の歌」では乳母が子供に説得されており、乳母は子供に対して哀れみや同情ではなく、また子供に対して権力を振りかざす事もなく子供を尊重し、彼らに共感しようとする態度を示している。ブレイクは自らの言葉で語りその力を示す子供を描く事で読者に子供という存在に注目させ、子供がただその無垢を称えられて教えられるばかりではなく其々に力や主張を持ち、大人の心や社会を動かす存在であると示した。

引用・参考文献

Barbauld, Anna. "On Education." Ed. Lucy Aikin. *The Works of Anna Laetitia Barbauld*. Vol. 2. London: Paternoster, 1825.

- . *Hymns in Prose for Children*. London: J. Johnson, 1801.
- Blake, William. Ed. Andrew Lincoln. *Songs of Innocence and of Experience*. New Jersey: Princeton University Press, 1991.
- Bleen, Jennifer, ed. *Women Romantic Poets 1785–1832: An Anthology*. London: Everyman, 1994.
- Gilham, D. G. *Blake's Contrary Sates: The Songs of Innocence and of Experience as Dramatic Poems*. London: CUP, 1966.
- Hirsch, E. D. Jr. *Innocence and Experience: An Introduction to Blake*. New Heaven: Yale University Press, 1964.
- Janowitz, Anne. *Women Romantic Poets: Anna Barbauld and Mary Robiinson*. London: Northcote House, 2004.
- Lawson, John and Harold Silver. *A Social History of Education in England*. Vol 18. London: Routledge, 1973.
- Locke, John. “Some Thoughts Concerning Education.” *The Works of John Locke*. Vol. IX. London: Scientia Verlag Aalen, 1963.
- Robinson, Mary. *Lyrical Tales*. Oxford: Woodstock Books, 1989.
- Watts, Isaac. Ed. George Burder. *The Works of the Reverend and Learned Isaac Watts*. Vol. 4, 5. London: J. Barfield, 1810.